

定年退職教員紹介

楠明子先生のご退任にあたって

原 英 一

楠明子先生と最初にお会いしたのがいつだったのか、記憶が確かではない。あまりに親しくお付き合いをさせていただいてきたので、数十年来の友人のような気がしているのだが、あらためて考えてみれば、初対面はほんの十数年前、2001年にシェイクスピア学会のセミナーに先生からお誘いをいただいたときのことだった。そのときの先生の存在感とリーダーシップは私に強烈な印象を与えた。ところが、学会当日には、その先生が一步後に下がり、司会進行役に徹されたのである。ご自身にも発言したいことが山ほどあったに違いないのに、このように他の発表者に主役の座を譲られたのは、いかにも先生らしい品位ある振る舞いであったが、私としてはフラストレーションを感じた——先生ご自身のお考えを聴きたい、それが発表されないままではあまりにもったいない。そこで、セミナーのテーマで論文集を作りませんかと先生に提案したのである。この企画は『ゴルディオスの絆——結婚のディスコースとイギリス・ルネサンス演劇』（松柏社、2002年）として結実することになった。その編集作業の中で最も印象深かったのは、先生の学問に対する溢れんばかりの情熱とエネルギーギッシュな仕事ぶりであった。先生のご経歴をみると、国際的なルネサンス演劇研究者としての活躍を支えてきたのはこの情熱とパワーであったことが分かる。

楠明子先生は、1965年3月に東京女子大学文理学部英米文学科を卒業された。同年4月に東京大学大学院修士課程に入学され、研究者としての歩みを始められた。早くも同年9月にはMt. Holyoke College 大学院に留学、1968年6月に同大学院の修士課程を修了されている。東京大学大学院の方は、1972年3月に修士課程を修了、同年4月に博士課程に進学された。1975年3月に同課程を満期退学の後、1978年10月にはUniversity of London のKing's College 大学院博士課程に入学、1981年6月に同課程を単位取得修了されている。その後もキングズ・カレッジでの研究を断続的に続けられて、1992年11月にロンドン大学から博士号（PhD、英文学）を授与された。先生が大学で専任の職を得たのは、1975年9月に北里大学教養部の専任講師となったときであるが、1983年4月には母校、東京女子大学の文理学部に専任講師として迎えられた。1988年4月に助教授に昇任、1993年4月から教授となった。2005年4月、本学大学院に人間科学研究科博士後期課程が設置されると同時に人間文化科学専攻の博士論文指導教授となった。

博士後期課程での先生の指導ぶりは、大変に厳しかったようである。学問の世界

は甘くはない、プロの研究者になろうというなら、それなりの覚悟と厳しい修練が必要である——そのような信念の下に学生たちを鍛えた。あまりの厳しさにときに涙を流しつつ、それでも懸命についていった教え子たちが先生から学びとり自らの血肉としていったのは、不撓不屈の精神といかなる障害も蹴散らしていく活力であった。先生は2010年度に定年となったが、大学院特任教授としてさらに2年間博士後期課程学生の指導にあたられた。先生の下で博士号を取得した教え子は4名である。

楠明子先生のご研究は、シェイクスピアの時代すなわちイギリス・ルネサンス期の女性と女性作家たちを対象としている。これまでに『英国ルネサンスの女たち——シェイクスピア時代における逸脱と挑戦』（1999年）、『メアリ・シドニー・ロウス——シェイクスピアに挑んだ女性』（2011年）、『シェイクスピア劇の〈女〉たち——少年俳優とエリザベス朝の大衆文化』（2012年）という3冊の単著を、いずれもみず書房から上梓されているが、そこに共通する単語として、「シェイクスピア」の他に、「女」があることが注目される（最新刊の〈女〉は実は少年俳優を指すのだが）。ルネサンス期イギリスにおいては、「貞淑」、「寡黙」、「服従」が女性の美德とされていた。しかし、この時代にも、そのような規範から逸脱して、独自の主体を構築しようとした女性たちがいたのである。先生は、このような「挑戦する女性たち」、とりわけ男性の支配領域を果敢に侵犯していった女性作家ロウスを、深い共感を抱きつつ、研究された。それは自らが女性研究者として、さまざまな差別や偏見と闘ってきた経験とつながっているに違いない。先生が大学院に進まれた当時は、「学問は女がやるべきものではない」というのが「社会通念」であった。先生は日本シェイクスピア協会の会長を2005年4月から2009年3月まで務められたが、女性が会長となったのは半世紀に及ぶ協会の歴史で初めてのことであり、英文学関係の主要諸学会の中でも空前のことだった。それは先生が、ジェンダーの垣根を越えて、ルネサンス期演劇研究の日本における第一人者として認知されたことを意味している。ここに至って先生は、研究の道を志す全ての女性たちにとって輝かしいロール・モデルとなったのである。

この度のご退任は先生にとっては新たな出発である。これからは国際的研究者として思う存分仕事ができる、とますます意気軒昂、情熱を燃やしていらっしゃるのだ。ルネサンス期女性の主体構築を主題とする英文の著書をイギリスで出版するために準備を進められるとともに、ケンブリッジ大学から出版予定の *Cambridge World Shakespeare Encyclopedia* の編者の一人として編集作業に没頭されている。そればかりではない。来たる2016年はシェイクスピア没後400年にあたり、それを記念する大規模な国際学会 Stratford/London World Shakespeare Congress がイギリスで開催される。先生はその主催者 International Shakespeare Association の執行委員、および大会委員として企画に携わっておられるのだ。挑戦を続けて止むことのない先生のお仕事から、研究の同志として、今後も目を離すことはできない。